

新アッシリア帝国の男系系図と王母

—パザルチック碑文の王母サムラマトは女戦士であったか—

古 畑 正 富

1. 序

新アッシリア帝国時代、アッシリアは被征服民族を自領に再編したため、広域の戦線において堅固な防衛的体制を維持する必要があった。その結果、次第に属州統治が重要な位置を占め、中央宮廷に勢威を張る宦官とともに、地方を掌握する権臣の台頭が進んだ。アッシリア王、アダドニラリ三世の在位は紀元前810-783年、西方遠征の成功で版図を拡げた祖父シャルマネセル三世（紀元前858-824年）の記憶が連鎖しつつも、父のシャムシ・アダド五世（紀元前823-811年）の治世下で帝国が分岐を迎えていた時代であった。このように、アダドニラリ三世を取り巻く風景は、内部に陰陽を内包し、緊迫する政治情勢であったことを先ず指摘したい。パザルチック碑文の背景となった同盟戦争が紀元前805年に行なわれたアダドニラリ三世のアルパド遠征であったことは確実である。軍事遠征記録の年代表示として「リンム表」の情報を信じれば、これ以外の候補を見出だすことが難しく、クムフ王の支援によるユーフラテス渡河と奇襲攻撃が、アルパド遠征の本質であったことには信憑性がある¹⁾。紙幅の関係上、この軍事遠征の詳細な考証を省略する

キーワード：男系系図、軍管区、王母の所領、大地、母性形象

けれど、戦争原因など主要点の分析は、N・ネエマンの見解に従っている²⁾。

パザルチック碑文の序文(1-10行)において強調される事件は、①ユーフラテス渡河 ②王母サムラマト参戦の記録である。アッシリア人にとって、「母なる」(die Mutter) ユーフラテス河は、大地(die Erde)に刻み込まれた第一の「地平線」であり、それを越え進むことは他界への旅路に他ならなかった。それ故、シャルマネセル王朝だけでなく、後代に至っても、ユーフラテス渡河は人々の心に深い印象を残していたのだ³⁾。サムラマトが王母と云いながら政治的に無力な存在であったならば、ユーフラテス渡河のような重要戦鬪と結合されることはなかったと考えられる。しかし、アッシリア史において、女性が将領として戦争指揮に当たったことは極めて特異であり、パザルチック碑文の序文が虚空間のような記事であった点是否めない。本論の目的は、アッシリア人の思想的背景を探り、こうした錯綜する問題「パザルチック碑文の王母サムラマトは女戦士であったか」に対して、論理的な考察を試みることである。

帝国を「覇権国家」として考慮するのか、あるいは、「諸民族連邦」として多民族による融合世界を強調するのか、論ずる立場により結論が異なってくる。本論では、覇権国家(外核)と分権国家(内核)から生じた二重の結界を張り、しかも、内核の方に重みがあったという「自由帝政」の前提で話を進めていこう。

【パザルチック碑文の序文：1-10行 日本語訳】

- 1 アッシリア王、アダドニラリ三世の境界石碑。
- 2 アダドニラリ三世は、アッシリア王、シャムシ・アダド五世の子であり、
- 3 サムラマト(セミラミス)の子である。
サムラマトは女王(原義は「宮女」)であり、
- 4 アッシリア王、シャムシ・アダド五世[の横に並び]
- 5 強き王、アッシリア王、アダドニラリ三世の母である。

- 6 サムラマトはシャルマネセル三世の家の嫁である。
- 7 a シャルマネセル三世は、4つの方面の王である。
- 7 b ウシュピルルメは、
- 8 クムフ（の民の）王であり、アッシリア王、アダドニラリ三世と
- 9 女王であるサムラマト（セミラミス）をして
- 10 ユーフラテス渡河を行なわせた。

2. 軍管区と移動宮廷の幻影

歴史学者のD・リーベンがローマ帝国の概念を次のように定義した。「紀元前二世紀からローマ帝国と宇宙（*oikoumene*）を同一視したのは、ギリシャ系のストア哲学者であった。こうした理念は、ローマの政治家や知識人の精神にも深い影響を与えて、紀元一世紀には世界（大地の環 *orbis terrarum*）とインペリウム（*imperium*）は同一とみなされるようになった」⁴⁾。しかし、大地（*die Erde*）から派生した地方性もまた、帝国内部に内包されていた可能性を否定することはできない。この問題に関して、リーベンは次のように語る。「前近代的な帝国の場合に、直接統治（*direct approach*）と間接統治（*indirect approach*）の区別が不明瞭である。帝国の規模や連絡線の問題から、中央集権による完全な官僚制はあり得ず、どのような帝国でも長期的には地方の支配者やエリートに協力を仰がざるを得ない」⁵⁾。古代オリエン特世界の帝国建設者は、王朝の一門意識と集権的な軍事国家を希求する傾向が強く、初期の段階では王都の定性を基盤とした城塞都市網の構築を目指した。新アッシリア帝国も例外ではない。シャルマネセル三世時代に明瞭となった、王都（*āl šarrūti*）と軍事衛星都市（*āl dannūti*）の網の目は、そうした共通認識を示す典型的な例である⁶⁾。しかし、これは人工的な宇宙にすぎなかった。直接統治から間接統治への移行が破綻した結果、地方の内乱が勃発し、地方の群雄が覇を競う時代が招来される場合が歴史上少なくなかった（地方軍閥

→分断国家→帝国崩壊→乱世)。その場合、直接統治の質的変容を示す端緒が軍管区の成立と云えるのではないか。ローマ帝政後期の「帝国4分制」(4分統治制とディオケセス)、あるいはビザンツ帝国の「テマ制」など、軍管区は帝国の防衛的な総合戦略を考える上で大きな手掛かりとなるが、その影は新アッシリア帝国にも着実に忍び寄っていた⁷⁾。

パザルチック碑文7行目の「4つの方面の王」(*šar kibrat 4-ti*)という表現は、軍事史に換骨奪胎すると「東西南北」(方位型)の戦線に変換される。あるいは、現象学で云うところの *die Gegend* がこれに相当するならば、「4つの地平線を統べる王」という(中間の)隠喩が設定され、ローマ帝国の「大地の環」にもうまく変換できるはずだ。アッシリア編年記では、「宇宙」(*kiššati*)という修飾語が通常加わり、帝国の普遍性に関してより整った形式を備えていた。「アッシリア王名表」(AKL)は、「宇宙の王」(*šar kiššati*)の下腹に、「アッシュールの地の王=アッシリアの王」(*šar māt Aššur*)という称号が潜り込んだ形で重みを増していることを報告する⁸⁾。このように、アッシリアの特殊性は、土地の化身たるアッシュールが神格化され、それによって、アッシリアの歴史と宗教が強い同一性を持ったことだと考えられている⁹⁾。アッシュールを最高の守護神とする宗教的紐帯は、パザルチック碑文においても維持され、呪いの式文(21行)で列挙される神々の内、アッシュールが第一に記述される点にも投影されている。しかし、後述するとおりアダドニラリ三世時代、こうした保守的な思考は新しい時間の波に洗われることになる。

こうした直接統治の思想と新アッシリア帝国内の現実が完全に一致しているかどうかは別の問題である。軍管区に見られる召集軍方式(母集合としての中核機動軍+地方動員の分遣兵团)の出現は、戦場への戦力集中を阻害する「時間と空間」の壁が決定的な要因となっていた — これは、軍事における連絡線と行軍速度の問題にも密接に関係する¹⁰⁾。I. エファルによると、中央の常備軍だけでは「総予備」(*general reserve*)を王都に配備しても、奔命に疲れ兵力分散を招き、4つの戦線に効果的な対応ができなくなってし

まうからである¹¹⁾。古代軍事史における召集軍方式は、古代オリエントで珍しい現象ではなかった。旧約聖書の士師記を読むと、大周辺の古代ヘブライ人でさえ、その存在を直観的に知っていた¹²⁾。さらに、古層としての召集軍に対する記憶は、傭兵制から徴兵制に至る過程で多様な変容を重ね連鎖し(変形→変換)、現代では任務部隊(task force)として別の形で復活している。

新アッシリア帝国において、直接統治に裂け目をもたらした要因は、帝国の内核でありながら、外核にまで滲み出してきた地方性の融合圧であろう。ここで注目したいのは、アッシリアの記録に通底する、序文(普遍性)と本文(地方性)という二重の語り(double mention)である。序文と本文を対比すると、本文に内容的な重みが加わっているのは、当時のアッシリア社会の内実をよく表現している。パザルチック碑文においても、序文の普遍性は本文に入ると反転して(11-15行a)、逆に地方性への志向が顕著になってくる。ここで、新アッシリア帝国の地名を調べると、都市(die Stadt)の接頭辞URU(*āl*)と土地/大地の接頭辞KUR(*māt*)が互換関係、より正確には、緩慢な「回転」関係にあることが判る¹³⁾。両者の関係には軽重があり、一般的に古い時代ほど、KURが優勢になっていた。しかし、その傾向はシャルマネセル3世時代まで続くものの、アダドニラリ3世の治世に相貌を変えたと考えられる¹⁴⁾。この現象の解釈は難しいが、王都と軍事衛星都市の結び目が自然にほどけ、微妙な均衡状態(→対称形式)が解体され発生してくる「中核自治都市」(URU: urban district→borough)の痕跡を示す、と本論では考えたい^{14a)}。

仮に、中核自治都市が存在しても、それは新アッシリア帝国の地方性を払拭する根拠にならない。むしろ、帝国における中央権力の限界と地方性の拡張が表明され、中核機動軍との関連において、王都の不定性を予想することができるはずだ: リンム年代誌の内的変化(プロソポグラフィ)→内核(地方性の拡張)→外核(軍政の分散)→移動宮廷の存在理由。何故なら、中核自治都市の成立は、軍管区の成立を暗に証言するもので、帝国が間接統治に踏み出す第一歩となったからである。実際のところ、帝国の王都を不定・複

数化のまま巡察体制（移動宮廷／itinerary）を維持した方が西部の占領地行政にとって自然な方策であり、政治的な慰撫や軍事遠征の際にも有効であった¹⁵⁾。アダドニラリ三世時代になって、王都（土地神アッシュール）が多数の地方（それに属する都市）を掌握する一極体制から、花（die Blume）の群〈生〉地のように帝国の求心点が都市単位で分散する傾向に入ったと考えられる。時に揺り戻しは働いたが、全体的な流れは変わらなかった。紀元前745年に即位し西方遠征を再開したティグラトピレセル三世は、北シリアのアイン・ダラを破壊したが、帝国内部において軍事衛星都市（*āl dannūti*）が急増した様子は見られない¹⁶⁾。対照的に、重要都市に関して、ハマテを二つの管区（URU Kar Adad + URU Nuqudina）に細分するなど、軍管区・中核自治都市のシステムが次第に展開している状況がうかがえる¹⁷⁾。

アダドニラリ三世時代、帝国中枢部でも、軍管区・中核自治都市は既に現れていたと考えられる。王母サムラマト関連の記録を見ると、当時の重要都市カルフの総督バール・タルツイ・イルマ（紀元前797年のリンム）は、奉獻した神像の中で彼女と（アッシュールではなく）ナブーを讃えている¹⁸⁾。ここに一神教の萌芽を推測する考えにも一理あるとは思うが、より自然な発想として、カルフとその土地神ナブーの心的結合（→地方的な一神礼拝の政治的強調）、ナブーがカルフ地方の神々の中で主導的な役割を果たしていたことを強調したい。換言すれば、バール・タルツイ・イルマはアッシュールからの自由、すなわち王都と一定の距離を置くことを、奉獻碑文を通じて誇示した。ただし、王家との信頼関係を王母サムラマトに帰着させることで無用の軋轢を避けようとした—そうした遠隔操作の意図が感じられてならないのである。

ここで、王母サムラマト、軍管区・中核自治都市の接点がカルフを「場」として断片のように浮かび上がってくる。王母サムラマトはアッシリア社会の女権向上の結果浮揚されたわけではなく、（帝国西部出身のエリートを起点とした）地方支配者により神輿として担がれた幻影的存在に過ぎなかったのではないか¹⁹⁾。しかし、虚としての権力であっても、それを真として飾る

ために宮廷内の軍事的実質と絡み合うことになる。

3. アッシリアの男系系図に投影された王母

アッシリア人の伝統的な心性として、戦争における勝利の源泉を男性の力に求めたことはよく知られている。しかし、アッシリア人の精神の中で女性の全面的否定が行なわれていたわけではない。大地（die Erde）と固着した母性形象（die Mutter）には憧憬を抱いていたようである（視点：少年→母）²⁰⁾。ただし、ここで注意しなければならない点は、アッシリア人の現実思想において、母性が内核として秘められた存在であったことだ。アッシリア編年記だけでなく、アッシリア王名表でも外核（可視）となったのは、男系系図と惣領相続のシステムである。アッシリア王名表の基本パターンは、*mār ... mār ... mār*という惣領（長子）の連鎖であり、篡奪者の場合でも、*mār lā mammāna* (son of nobody) が示すとおり、*māru* が固定使用されていた。この場合、アッシリア史料において *māru* 「子」≒ *aplū* 「長子」という認識が働いていたことは、確実と考えられる²¹⁾。

それでは、何故、王母サムラマトはアッシリア伝統の男系系図に名を連ねたのか。この問題に関して、網野善彦の東西系図論が重要な示唆を与える²²⁾。網野善彦は日本中世の系図を検討して、男系系図（東国型）と女系系図（西国型）の二つに区分した。女系系図（西国型）の特徴は、網の目のような姻戚関係を重視する点であり、貴族制社会（magnate）の一門意識をよく表現している。この影響は西国の武士団にも波及し、東国とは様相を異にした相続が行なわれていた。対照的に、男系系図（東国型）の背景には、主従制社会の人脈が系統樹となり、主人と家人群の重層構造が調和を保つ上で重要な支柱であった。しかし、男系系図に女系要素が皆無であったわけではない。その場合、原型の重みによって、主従制社会の方向に傾斜する形で女系要素の融合が見られた。東西の接点のような虚空間（→調和変換）に出現

するのが特徴であり、網野善彦によれば、女性が所領（土地）に対する自立した権利を保持していたことに重大な原因があったと云う²³⁾。

新アッシリア帝国の軍事行政文書によると、AMA. MAN（王母）と結合される部隊が確かに存在していた。王母部隊に関しては複数の名称が記録され、単一ではなく、宮廷外に中心点を持った複数の部隊の存在が予想される。ADD no.857ほかの事例から判断して、(1)王母のキツル隊 (*kišir* AMA. MAN) (2)王母のクルブトゥ隊 (*qurbūte* AMA. MAN) が行動していた²⁴⁾。新アッシリア帝国の軍事組織では、キツルの方が一般的な部隊であり、中核機動軍とは云えないが、近衛軍団（旗本部隊）の一部を構成したことは間違いないだろう (*ana kišir akšurma ... eli ummānātēja ... uraddi* 「私は彼らを部隊に編成して私の軍団〔の分遣兵団〕に編入した」)²⁵⁾。キツルの本質に関しては、地方から徴募された「民族兵部隊」であると一般的には考えられている²⁶⁾。

アッシリア書簡は、*annūti ana ša piṭhallāti ana kiširi ša raminiḳa tutāršunu* 「(彼らの) 一部をあなたは騎兵たる、あなた自身の部隊に回す」と報告し、騎兵との密接な関係を示唆する²⁷⁾。このように、キツルを明確な正規軍（野戦部隊）として定義すると、王母のキツル隊は「王母の顕彰旗を掲げた騎兵部隊」という可能性が歴史現象（反復性）の上から強くなる。比論として、根津由喜夫が挙げるビザンツ帝国の事例を見てみよう。1121年、皇帝ヨハネス2世がペチェネグ人迎撃のために出陣した。戦況が膠着状態に陥りかけた際、歴代皇帝が常に戦場に伴っていた「聖母のイコン」に祈りを捧げた後、ヴァリャグ人近衛軍団に出撃を命じた。戦勝後ヴァリャグ人たちによって、コンスタンチノーブルに聖オーラフ教会（ヴァリャグ人の「聖母教会」）が建立された事跡を、ビザンツ帝国史料に今でも見出せると云う²⁸⁾。恐らく、王母のキツル隊に属する兵士たちは、王母所縁の地出身であり、そこから徴募されたと考えてもよいだろう。しかし、これでは、実際の指揮者が王母であったか否かははっきりと判らない。

王母のクルブトゥ隊の場合はどうだろうか。この問題に関しては、キツ

ルの攻撃性とは異なる、クルブートゥの防衛的な本質を先ず考察しなければならない。複数のアッシリア書簡が報告するとおり、「王の家を守護する兵士」(royal family's guard)でありながら、「草」としての地方性と（そこから自然発生する連帯意識のため）隠密性の高い諜報連絡部隊の役割を果たす場合が多かったようだ²⁹⁾。情報の量的優位から、本論では*kišir šarrūti* = *qurbūtu*とするよりも、両者の不連続性をむしろ強調したいのである（→換質命題）。

旧約聖書を読むと、石田友雄が正しく指摘するとおり、ダビデの近衛兵の源流は確実に地方にあって（サムエル記上22章1-22節）、宮廷でも身边には地方から独自徴募した外人部隊が存在した（サムエル記下15章18-23節）³⁰⁾。アブサロムの反乱時にあってダビデを見捨てず、その逃亡の「場」に随伴するほどの忠順を維持する社会経済的背景はどこにあったのだろうか。論理的には、宮廷外において、王家独自の領土（私的荘園）が存在したと考えることができる。それでは、王母のクルブートゥ隊も、王母領の年貢で独自に養われていたということになるのだろうか（→ローマ帝政後期→皇后や皇太后[王母]の地方所領）。

キツル隊とは対照的に、クルブートゥ隊の記録はアダドニラリ三世時代に遡って現れるが、「ニムルド出土のワインリスト」によると、調達された兵の軍装に関する覚え書である（5 lim *lubūšu* ¹⁶ *qurbūtu* 「クルブートゥ隊の軍装5000着」）³¹⁾。しかし、こうした情報は実戦記録の範疇にとどまらず、観兵式や領地の警護のような平時の文脈にも通用することを想起する必要がある。仮に、王母のクルブートゥ隊が元来、彼女の私領における子飼いの衛兵であったとしても、軍装の情報では特に矛盾が起こらない。ここで、T・クワスマンとS・パルボラが公刊した新アッシリア帝国の社会経済史料の中に面白い記録が発見される（ADD 1164）³²⁾。そこにはクルブートゥ（r.2）の名称が現れ、大献酌官（r.4）や農夫（r.5）と並べられる点が興味深い。紀元前二千年紀のヒッタイト貴族社会（封建制度）の中で、クルブートゥの長はGAL MEŠEDIと呼ばれ、「ワインの長」（GAL GEŠTIN）と並び称されて

いた³³⁾。時代は下るがアダドニラリ三世時代になって、軍管区・中核自治都市という間接統治（→地方分権）が新アッシリア帝国で復活を始めるとしたら、それを支える社会経済的な基盤（莊園公領）の筆頭は葡萄園の経営ということになるだろう。王と同じく地方にある王母領の私的莊園もやはり葡萄園を主体にし、その警護のためにクルブトゥ隊を養っていたと考えれば一応の筋道は通る。また、クルブトゥ隊の一部は王都の宮廷に出て王母の傍らに仕え、衛兵として活動するとともに、宮廷と王母領を連結する諜報連絡部隊の役割も兼ねていた。その生活保証を王母が握っているとしたら、彼女に対するクルブトゥ隊の忠順は非常に高かったと考えられる³⁴⁾。

クルブトゥ隊（→虚の軍事力）を別にすると、王母サムラマトが正規軍を実質的に掌握していなかったことは、紀元前805年のアルパド遠征以後の政治状況を見れば判ってくる。アダドニラリ三世の即位年齢に関して明確な情報はないが、アッシリア史料に共通する文学的表現を考慮すると、父王シャムシ・アダド五世の死後（紀元前810年）、彼が少年時に即位したことが推論できる³⁵⁾。これが正鵠を射ていれば、サムラマトは摂政母として政治権力を有していたことは間違いない。しかし、アダドニラリ三世が成長するに連れて政治権力の表舞台から下野していくのは、彼女が真の軍事力を基盤に持たない幻影的な存在であったことの証左である。その代わりに台頭するのが真の黒幕であった地方勢力の利益代表、シャムシ・イルのような権臣であった（*tartānu*）。彼はアダドニラリ三世の死後にも、アッシリア軍の総司令官（*tartānu*）として勢威を振るい、宮廷における権臣政治は頂点に達した。シャムシ・イルにはアッシュールに奉獻した碑文があり、この点でベール・タルツイ・イルマと異なっているように見えるが、最高司令官としての立場から仕方のない段取りであった（→宮廷政治）³⁶⁾。シャムシ・イルは地方支配者であったと同時に、宮廷の軍事貴族として栄達したからである³⁷⁾。

我々が旧約聖書から知るのも王母サムラマトではなく、その息子アダドニラリ三世の遠い記憶だけである（列王記下13章5節）。これらの政治潮流を考慮すると逆説的な見方ながら、紀元前805年のアルパド遠征で（王母のキ

ツル隊も含む) 中核機動軍を指揮した総大将の名前が浮かんでくる。その人物は紀元前808年のリンム、アッシリア軍の総司令官 (*tartānu*) として記録されたネルガル・イラヤという将軍であろう^{37a)}。

4. 旧約聖書のヨシヤ王一門と王母 (補題)

アッシリアと関連して、旧約聖書の男系系図にも少し触れておこう。王母サムラマトの事例はユダ王国末期、特にヨシヤ王一門の新しい政治体制 (*magnate*) を考える上で重要な示唆を与える。旧約聖書の系図が男系系図であることは確かであるが、アッシリア王名表と比べると、それは女系の要素 (西国型) が絡み合う融合形式であった。ユダ王国において、王母は「グヴィーラー」という称号を持ち、即位後は特別の榮譽を宮廷で捧げられた³⁸⁾。紀元前二千年紀には、姻戚関係を重視する女系系図 (西国型) の特徴が現れていたことが知られている³⁹⁾。

しかし、ユダ王ヨシヤの系図を分岐として、王母の地方所領に関する概念が混在を始めるのは面白い現象である。ヒゼキヤからマナセの即位までは「Aの息子Bが王となった。Bの母の名はCと云い、Dの娘であった」という従来の定式が維持されていたが、(アモンの即位後) ヨシヤからツエデキヤまでは連続的に、「Aの息子Bが王となった。Bの母の名はCと云い〈ある地方出身の〉Dの娘であった」というように加筆されていく。エルサレムほかの都市が加筆される事例はあったが(ヨアシ: 列王記下12章2節, アマツヤ: 列王記下14章2節, アザリヤ: 列王記下15章2節), ヨシヤ以後のように(エルサレムを含むが、それよりも明瞭に) 地方分散した「母」の出自を誇示することは異例である⁴⁰⁾。

こうした変形 (*die Verwandlung*) が、新アッシリア帝国の男系系図 (東国型) と共通する要素かどうかは、十分に検討する価値がある⁴¹⁾。ただし、旧約聖書の記述を直截に読むと、アッシリア王センナケリブによるエルサレ

ム攻略（紀元前701年）の後、「外核」の思想面では新アッシリア帝国の影響を拒否する姿勢を示すが（→申命記派歴史家と新思潮）、「内核」たる政治史の面では逆に融合を始めたように感じられてならない（→「潜在意識」→分散する地方貴族の形成）⁴²⁾。イエホヤキンに関しては特に、「ユダの王イエホヤキンと彼の母，その家来たち，その高官たち，その宦官たち」と語り，閉鎖的な貴族集団（→エルサレム派）を言及している（列王記下24章12節）。彼らは一団となってバビロンに捕囚されたものの，ヨシヤ王朝自体が存続したことは示唆的である。

5. 結び — 鍵概念としての大地と母性形象について

本論において，パザルチック碑文の序文（1-10行）の解釈を中心に，アダドニラリ三世の王母サムラマトが女戦士であったか否かという問題を考察した。アッシリアの男系系図に内包される女系要素を追跡すると，王母サムラマトは自立した所領を保持し，そこで衛兵（私的軍隊：王母のクルブートゥ隊）を有していたことが判る。しかし，衛兵はあくまでも警護兵に過ぎなかった点が重要であり，地方の王母領の奉公関係を公的な軍事遠征に拡大しても，いきなり軍事攻撃という線は出てこない。実際，クルブートゥ隊は西方遠征において，軍事行動より王母の諜報連絡活動に当たる場合が多かったと考えられる。

王母サムラマトが移動宮廷とともにユーフラテス渡河をしたことが事実であっても，それは摂政母と少年王という政治的な庇護関係の外延であり，ネルガル・イラヤという将軍が総大将（*tartānu*）としてアッシリアの中核機動軍を指揮したと推論する方が自然である。この状況ならば，アダドニラリ三世後期の権臣シャムシ・イル（*tartānu*）の登場とも連続する。王母サムラマトが王都の留守宮廷に残らなかったのは，彼女が（帝国西部出身のエリートを起点とした）地方支配者層により神輿として担がれていた証左と云え

るが（正規軍：王母のキツル隊）、これもまた「王母の顕彰旗を掲げた部隊」ととどまり、サムラマト≡女戦士という図式に収斂されない可能性を示した。アダドニラリ三世を端緒とする軍管区・中核自治都市、そして移動宮廷の存在理由を考えても、王母サムラマトが西方遠征で女戦士として行動したことを現時点で是認することは困難である。したがって、旧約聖書の男系系図と同様、アッシリア伝統の「戦う兵士」と「産む母」という男（≡父）と女（≡母）の二重中核（外核+内核）は、アダドニラリ三世時代に未だ崩れていなかったとみなすべきであろう。

アダドニラリ三世も結局は、「母」たるサムラマトを否定することはできなかった。そうでなければ、王母サムラマトの名がパザルチック碑文のような建設碑文（*taḫūme*）の中に記録されることもなかったはずである⁴³⁾。歴史学者のA. コルバンは入手可能な資料が極端に少ない「女性」を対象にした歴史記述と、その実現可能性について語っている⁴⁴⁾。本論においては、本質仮説の一つの在り方（原型）として、フッサールの故郷世界（→die Heimat→die Welt）を der Mutterboden（土地≡土壌）／die Muttererde（「母」なる大地）という男／女（≡父／母）の二重中核に再構成し、鍵概念として大地と母性の融合形象を基底に設定した⁴⁵⁾。都市（die Stadt）と花（die Blume）は、そこからの形象連鎖である。ロマンの枠組みとしての共通認識を提示しなかった訳で、具体的には鍵語（das Leitwort）として本文中に明減させ、事象との調和を図った。それを公準として受容できるか否かは未だ試行錯誤の段階であるが、マイモニデースとマーラー、そしてサイドに流れ入る「彷徨える魂」を準連続体の連鎖と見ると、そこには大地への回帰を望む人間精神の一面が表現されているように思えてならない⁴⁶⁾。そうした視座に立てば、移動宮廷と戦塵舞い散る大地の上で母と濃密に接したアダドニラリ三世の心に、どのような感情が芽生えたかを類推できるのではないだろうか。その際、アダドニラリ三世によって再発見された基礎心性が、王母サムラマトを媒体とした「惻隱の情」であり、それが後の転換期を生きる原動力になったと、本論では暫定的に考えてみたのである（→[ヘブライ語

hesed] → die [Menschen] liebe)。

最後になるが、本論作成に当たってアナロジーの役割を果たした文学作品を紹介する。レイ・ブラッドベリ『火星年代記』の交響詩的技法のほか、特に印象に残った作品として、ケルテース・イムレ（2003：岩崎悦子訳）『運命（das Schicksal）ではなく』（国書刊行会）を挙げてみよう。同書277-78頁におけるケルテース・イムレの言葉は、歴史における母性形象の意味を考える上で重要な示唆を与えるものだ。死の煙が漂い流れる日常、苦悩と苦悩の間にも幸せに似た何かがあったと少年は云うけれど、本論の立場に置換すれば、その何かとは虚空間（→象徴変換）として立ち上がった母性形象（→自由の大地：die Erde von der Freiheit）であり、それを内核として惻隱の情が心の外に次第に重ね合わされたということである。少年のその後の人生航路を物語る描写はないが、自らの内に再発見した「母」は記憶（das Gedächtnis）の中で神話化し、それに随伴して少年は自己が還元され統一される新しい「場」を目指すことになるだろう（精神の連絡線の再構築：陸→[海] →陸）。

付記

本文中で使用した「論理記号」は、中村秀吉（1972）『パラドックス－論理分析への招待』（中公新書297）、中央公論社ほかを参照して記述した。また、形象連鎖を説明する主たる道具として「ドイツ語」を意図的に表記しているのは、印欧語研究を念頭に置き、ドイツ語名詞における男性・女性・中性が非常に古い直観的な形象を示す道標と考えているからである。これにより、第二の文脈を人工的に並行させ、一定の心理的効果をあげることが目的である。

注

- 1) バザルチック碑文（原典）：V.Donbaz（1990），“Two Neo-Assyrian Stelae in the Antakya and Kahramanmaraş Museums”，*ARRIM* 8, pp.5-24（→RIMA 3, A.0.104.3）。「リンム表」に関しては，A.R.Millard（1994），*The Eponyms of the*

Assyrian Empire 910-612 BC, Helsinkiを参照。

- 2) N.Na'aman (1991), "Forced Participation in Alliance in the Course of the Assyrian Campaigns to the West" In I.Eph 'al and M.Cogan (eds.), *AH, ASSYRIA... : Studies in Assyrian History and Ancient Near Eastern Historiography presented to Hayim Tadmor*, Jerusalem, pp.84ff.
- 3) 山田重郎 (2003) 「アッシリア王室碑文における数字操作とプロパガンダ」『史境』46, 28-43頁を参照。「増水期」のユーフラテス渡河は、パザルチック碑文の並行資料「アダドニラリ三世のシェイク・ハンマド碑文」(=BM131124) ほかでも確実に言及される。また、旧約聖書の自然境界論に関しては、N.Na'aman (1986), *Borders and Districts in Biblical Historiography*, Jerusalemを参照。
- 4) D. リーベン (2002) 『帝国の興亡・上巻』(袴田茂樹監修) 日本経済新聞社, 70-71頁。
- 5) D. リーベン, 注4, 100頁。司馬遼太郎『項羽と劉邦』, 新潮社は、リーベンの命題に一つの解答を与えている。
- 6) 新アッシリア帝国における王都と軍事衛星都市の関係は、Y.Ikeda (1979), "Royal Cities and Fortified Cities", *Iraq* 41, pp.75-87を参照。
- 7) 池田裕は軍管区と明言しないが、「戦略都市」(strategic city) という用語で軍政上の変化が起こったと予想する。Y.Ikeda (2003), "<They Divided the Orontes River between Them> : Arpad and its Borders with Hamath and Patin/Unqi in the Eighth Century BCE", *Eretz-Israel* 27, pp.91-99. 帝国における「防衛的な総合戦略」に関しては、E.N.Luttwak (1976), *The Grand Strategy of the Roman Empire : From the First Century A.D. to the Third*, Baltimore-Londonを参照。
- 8) RIMA 1, 0.73.6ほか。さらに、S.Yamada (1994), "The Editorial History of the Assyrian King List", *ZA* 84, p.31を参照。
- 9) 渡辺和子 (1998) 「アッシリアの自己同一性と異文化理解」『岩波講座 世界歴史2』, 岩波書店, 271-300頁, 特に298頁。
- 10) ローマ帝国 (三世紀の危機) と中核機動軍に関する基本的な認識は、塩野七

生 (2003)『迷走する帝国』(ローマ人の物語Ⅻ), 新潮社に整理されている。

- 11) I.Eph 'al (1983), "On Warfare and Military Control in the Ancient Near Eastern Empires : A Research Outline" , In H.Tadmor and M.Weinfeld (eds.), *History, Historiography and Interpretation : Studies in Biblical and Cuneiform Literatures*, Jerusalem, p.102.
- 12) 鈴木佳秀 (1998)『ヨシュア記・士師記』(旧約聖書Ⅳ) 岩波書店, 260-62頁。
- 13) S.Parpola (1970), *Neo-Assyrian Toponyms*, Neukirchen-Vluyn を参照。
- 14) パザルチック碑文12行目の地名「パカルフブニ」に見られる緩慢な回転形象 (URU/KUR) に関しては, S.Yamada (2000), *The Construction of the Assyrian Empire : A Historical Study of the Inscriptions of Shalmaneser III (859-824 BC) Relating to His Campaigns to the West*, Leiden-Boston-Köln, p.93ほかを参照。比論としてのK・ゲーデル「回転宇宙論解」(≡アインシュタイン・一般相対性理論) に関しては数多くの参考文献があるけれど, ジョン・L・カステイ + ヴェルナー・デバウリ (2003: 増田珠子訳)『ゲーデルの世界—その生涯と論理』(青土社), 164-75頁(時間の輪) が判りやすい (→イマヌエル・カント『純粹理性批判』)。
- 14a) この問題に関して, 本論の発想原点となった研究は, J.N.Postgate (1974), *Taxation and Conscriptons in the Assyrian Empire*, Romeである。
- 15) アッシリア人に内包された「巡察」(itinerary) の思想に関しては, 例えば, L.D.Levine (1989), "K.4675 + THE ZAMUA ITINERARY", *SAAB* 3/2, pp.75-92を参照。シャルマネセル王朝時代には, 王都の不定性(複数化)は, 西方の多民族社会では珍しい現象ではなかったと考えられる。Y.Ikeda, above, n6.
- 16) アッシリア軍によるアイン・ダラの破壊に関しては, 池田裕 (2002)「風の足跡—北シリア, アイン・ダラ神殿によせて」『筑波大学地域研究』20, 13頁を参照。
- 17) H.Tadmor (1994), *The Inscriptions of Tiglath-pileser III King of Assyria*, Jerusalem, pp.60-61 (Calah Ann. 19 : 6-7).
- 18) D.Oates (1957), "EZIDA : The Temple of Nabu", *Iraq* 19, pp.26-39.
- 19) 王母サムラマトの西方起源説に関しては, M.Weinfeld (1991), "Semiramis :

- Her Name and her Origin”, Eph’al and Cogan, above, n2, pp.99-103を参照。
- 20) SAA 3, no.3 (=ニネヴェとアルベラのイシュタルに対するアッシュールバニパル王讃歌) ほか。女→母の形象転換は、パザルチック碑文 3 行目のMUNUS. É.GALにも見られる特徴である(宮女→[女王]→5 行目「母」)。S.Parpola (1988), “The Neo-Assyrian Word<Queen>”, *SAAB* II/2, pp.73-76. ただし, このような命題設定に関して, 「皇帝」ナポレオン伝に描かれたポーランド伯爵令嬢(／夫人)マリア・ヴァレフスカ(→レナール夫人)悲恋の物語が, 狭き門の入り口であったことは認めなければならない。
- 21) S.Yamada, above, n8, pp.26-27. K4310には, *Aššur-aḫu-iddina aplu kēnu mār Ninlil*「エサルハドン, 正当な長子、ニンリルの子」という表現が知られている。
- 22) 網野善彦 (1998)『東と西の語る日本の歴史』(講談社学術文庫1343), 166-209頁。
- 23) 網野善彦, 注22, 187-194頁 (=女系系図／西国型), 194-203頁 (=男系系図／東国型)。特に, 200頁では次のように語る。「鎌倉・南北朝期の古系図は, このように室町・江戸期の系図と比べると, 全体的にみて女性の比率が高い。それは, 女性が所領に対する自立した権利を保持していたことに理由があることは明らかである」。
- 24) 王母のキツル隊に関しては, *CAD K*, pp.437-38; クルブートゥ隊に関しては, *CTN III*, pp.32-33を参照。
- 25) Streck *Asb.* 82, iv 126. *CAD K*, pp.437-38によると, *kišir šarrūti*は「王の近衛軍団」(= the royal army)を意味した。
- 26) H.Tadmor (1988), “The urbi of Hezekiah”, *Beer-Sheva* 3, pp.171-78ほか。サマリヤ人部隊 (*CTN III*, 99 ii 20, 22) に関しては, S.Dalley (1985), “Foreign Chariotry and Cavalry in the Armies of Tiglath-pileser III and Sargon II”, *Iraq* 47, pp.31-48を参照。
- 27) *ABL* 304:12から引用。
- 28) 根津由喜夫 (1999)『ビザンツ―幻影の世界帝国』(講談社選書メチエ154), 172-74頁。

- 29) ABL 90 (SAA 1. no.76) Obv.13-14, Rev.1-8 ; ABL 306 + CT 53 221 (SAA 1, no.10) Obv.2-7 ; ABL 610 (SAA 1, no.240) Rev.8-12 ;あるいはNB Letter : CT 54 508 Rev. 8-9. クルブートゥ隊が内包する「草」としての性格に関しては, H.W.F.Saggs (1959), "The Nimrud Letters, 1952-PART V", *Iraq* 21, p.165を参照。
- 30) 石田友雄 (1986) 「イスラエル王国とユダ王国における王位の継承－王位継承闘争において決定的要因となった武装民に関する考察をめぐり」『オリエント』29/2, 8-9頁。
- 31) Wiseman, *BSOAS* 30, 497, ii 16-17. また J.V. Kinnier Wilson (1972), *The Nimrud Wine List : A Study of Men and Administration at the Assyrian Capital in the Eighth Century B.C.*, p.49.
- 32) SAA 6, no.28. 他にSAA 6, nos.30, 210, 255, 271を参照
- 33) R.H.Beal (1992), *The Organization of the Hittite Military*, Heidelberg, pp.342-57.
- 34) J.N.Postgate (1969), *Neo-Assyrian Royal Grants and Decrees*, Rome. 新アッシリア帝国に残存するヒッタイト型の「封建制度」は、王母の地方所領でも無視できない要素であったと考えられる。
- 35) *CAH* III/1, pp.271-72. W.H.Shea (1978), "Adad-nirari III and Jehoash of Israel", *JCS* 30, pp.101-13.
- 36) シヤムシ・イルが「土地」アッシュールに奉献した碑文 (=Crude drill-cut text on BM89106) に関しては, J.M. Reade (1987), "A Shamshi-ilu Dedication", *ARRIM* 5, p.53を参照。
- 37) シヤムシ・イルの地方根拠地に関しては, A.Lemaire and J.-M.Durand (1984), *Les inscriptions araméennes de Sfiré et l'Assyrie de Shamshi-ilu*, Genève-Parisのほか, 地名 (Til-barsip) の正確な比定を行なった S.Yamada (1995), *NABU*, no.2, pp.24-25を参照。
- 37a) A.R.Millard, above, n1, p.33. 当時のアッシリア宮廷における有力者は, 序列から考えて, ① *tartānu* ② *rāgir ekalli* ③ *rab šāqê* ④ *abarakku* ⑤ *šākin-māti*の

五本柱であった。

- 38) T.Ishida (1977), *The Royal Dynasties in Ancient Israel : A Study on the Formation and Development of Royal-Dynastic Ideology*, Berlin-New York, pp.155-57.
- 39) EA 286 : 9-13 EA 287 : 25-28 Kilamuwa A : 4. こうした貴族制社会の伝統が底流となって生き残り、ヨシヤ王一門によって再度強化されたとするのが本論の基本的な構想である。
- 40) Ihromi (1994), "Die Königinmutter und 'Amm Ha' arez im Reich Juda", VT 24, pp.421-29.
- 41) マナセの治世に関する重要な研究として, M.Cogan (1974), *Imperialism and Religion : Assyria, Judah and Israel in the Eighth and Seventh Centuries B.C.E.*, Missoula.
- 42) この問題に関連して, 「地の民」(アム・ハアレツ) という表現が申命記派歴史家の語彙であるという見解は, 見直してみるべきである。R.M.Good (1983), *The Sheep of His Pasture*, Chico, pp.109-22. 歴史的背景として A.Malamat (1979), "The Last Years of the Kingdom of Judah", In idem (ed.), *The Age of the Monarchies : Political History*, Jerusalem, pp.205-11を参照。
- 43) 山田重郎 (1999) 「軍事遠征と記念碑建立：アッシリア王 シャルマネセルⅢ世の場合」『オリエン』42/1, 1-18頁。
- 44) A. コルバン (渡辺響子訳) 『記録を残さなかった男の歴史：ある木靴職人の世界 1798-1876年』, 藤原書店における訳者解説 (424頁) を参照。
- 45) 谷徹 (2002) 『これが現象学だ』(講談社現代新書1635), 講談社, *passim*. 本論は, この著作の認識から少なからぬ影響を受けた。
- 46) G・マーラー『大地の歌』(Das Lied von der Erde⇒Das Trinklied vom Jammer der Erde) ほか。「詩人」マーラーの融合世界に関しては, 渡辺裕 (2004) 『マーラーと世紀末ウィーン (改題)』(岩波現代文庫・文芸82), 87-101頁が面白い。さらに, オマル・ハイヤーム (2004) 『ルバイヤート』(陳舜臣訳), 集英社と交響させることにより, der Kummer←[準連続体の固着⇌中間命題: der

Jammer] →die Trauer という（内核）傾斜融合を提示できるのではないかと考える。マイモニデースの思想に関しては「〈神はXである〉という型の、神を主語とする肯定命題が、〈神は-Xでない〉という型の否定命題に転換して理解されていく」という説明は示唆的である。井筒俊彦（1988）「中世ユダヤ哲学史」長尾雅人は編『ユダヤ思想2』（岩波講座・東洋思想第二巻），岩波書店，94頁を参照。このような命題設定をすることにより，マイモニデース→オイラーの基礎公式（① [自然] $e^{i\pi} + 1 = 0$ ② [虚数] $X^2 + 1 = 0 \therefore X = \sqrt{-1} = i$ （複素平面≡複合形象）へのミッシング・リンクを次第に理解できるようになる。換言すれば，大地（真のジン・テーゼ：die Erde）=0，（天空）神=1とした場合，中間「場」の環道思想と人類（ X/X^2 ：die [Mensch]heit）における虚空間の展開が「オイラー数学」の発想原点であったことは，宗教的な雰囲気満ちた彼のプロソボグラフィから予想できるということである（→虚のジン・テーゼ： $e^{i\pi}$ の連鎖構造→das fiktive Chaos）。虚のジン・テーゼに関する比論としては，ダンテ『神曲』煉獄編のほか，ミシェル・フーコー（1975）『狂気の歴史：古典主義時代における』（田村俣訳），新潮社，534-61頁（→人間論上の円環）を参照。対照的に，本論においては，真のジン・テーゼ（≡真のカオス）をガイアdie Erde（≡アーベルの群〈生〉体∈多様体）に投影して話を進めて来たのである。このように，大地を無形・[未完了]・還元「場」とする考え方は，ユダヤ教のミドラッシュ・アガダーの中にも変形されて表現されている。ドイツ・ポーランド系ユダヤ人の「ゴーレム伝説」（→彷徨える魂）に関しては，G・ショーレム（1985）『カバラとその象徴的表現』（小岸昭・岡部仁訳），叢書・ユニベルシタス169，法政大学出版局，218-74頁を参照。同書274頁において，ショーレムは次のように語る。「……ゴーレムを魂の，あるいは〈ユダヤ〉民族自身の象徴として解釈し，そうした全ての次元の上に立って重要なことが言えるかもしれない。しかし，心理学者の仕事が始まるところで，歴史家の仕事は終わるのである」。ショーレムの言葉を換骨奪胎して考察を進めれば，「エルサレム」の思想家に内包された（融合世界／故郷世界に関する）双曲面的な思考の在り方に眼がとまるかもしれない。この問題に関してE.W. サイド理解を深めるために，

本論においては、adoption（「外核」：宗主・属王関係）←「準連続体の固着≒中間命題：affiliation」→filiationという（内核）傾斜融合からの変形テーゼを提示しなかったのである。このように考えた方が、大地と母性の融合形象を基底にして「生地」（→産声の〔土〕地）の概念を繰り込んだ場合、大同小異に苦悩する「ハガルの子」の声（der Schrei / die Stimme：創世記25章12-18節ほか）に真摯に耳を傾けられるのではないだろうか。E.W. サイド（1998）『文化と帝国主義』（大橋洋一訳）、みすず書房。比論として、IEph 'al (1976), "<Ishmael> and <Arab (s)> : A Transformation of Ethnological Terms", JNES 35, pp.225-35を参照。

The Male Lineage of the Neo-Assyrian Empire and Queen Mother —Was Sannuramat Described as a Female Warrior in the Pazarcik Stele?—

Masatomi KOBATA

As to the Pazarcik stele, published by V. Donbaz, special attention has been paid to the figure of Sannuramat (Semiramis), Adad-nērārī III's queen mother. As pointed out rightly (RIMA 3. A. O. 104.3), such military-oriented character as Sannuramat is hardly to be explained by means of "normal" male lineage written in the Assyrian records. Because the military action of queen mother, who went with the king and the Assyrian army (task force) in the campaign to the west (805BC), was unusual in the first stage of the Neo-Assyrian empire. The purpose of this paper is to examine the position of Sannuramat in the Pazarcik stele against the background of the empire's localization.

Considering the Assyrian politico-military records relating to queen mother, we may conclude the following points. Such as:

- (1) It is highly probable that Sannuramat crossed the Euphrates with the Assyrian task force, but that the commander-in chief of it was the general named Nergal-ilāya. Sannuramat, therefore, was not a female warrior and did not participate in the real battle.
- (2) Presumably, Sannuramat was looking forward to a good news with her little son in the midst of mobile palace. Sannuramat was guarded by the "*qurbūtu*-soldiers (group) of queen mother" who were gathered from her private manor. In contrast to the *qurbūtu*-soldiers, there was the ordinary contingent called "*kišir* of queen mother". But, we believe, it cannot be directly connected with the command of Sannuramat (→

indirect approach).

(3) We get a strong impression that the empire' s localization, during the reign of Adad-nērārī III, was making steady progress in terms of internal structure. From the logical point of view, it becomes clear that Sammuamat won broad support from the local power of the empire.